あの人はね…

「なっ、お母ちゃん、あの人の足、ぶらぶらや！なんで？」

やっぱり息子が尋ねてきた。
向こうから松葉づえの中年の男の人が近づいてきたとき、いやな予感がしたのだった。
だけど、ムリもない。小学２年生の息子は好奇心いっぱいの年頃である。

「なあ、どうして、あんな棒もって歩いてるん？ なっ！」

息子はしつこく私の服を引っ張る。
だが、どう説明すればいいのかわからない。
松葉づえの人はどんどん近づいてくる。
うまく表現できなくて、相手に聞こえて気分を害されても困る。
もし、どなられたら・・・・と、息子をかばう気持ちも働く。

「なっ、なっ！」

と息子は催促する。
「あの人はね、足が悪いの」
やっとの思いで、それだけ言った。

話しあってみましょう。

☆　あなたがこの母親なら、ここでどう答えますか？

昔から、「目の悪い人、足の悪い人・・・」と障害者のことを表現してきました。
ある時、車いすに乗っている人から、
「ボクの足が、何か悪いことでもしたんかァ」
と言われて、ドキッとしたことがありました。

今もなお、それぞれの障害部分を「○○が悪い」と表現していることから、障害を否定的にとらえるという世の中の障害者観の根の深さを感じます。
「足が自由に動かない」という事実は、悪いことではありません。
足が自由に動かなくとも、いろんな方法で移動ができるようになれば、不自由や不便も少なくなります。駅にエレベーターが設けてあったり、ちょっと困った時に助けてくれる人がいれば、障害があっても楽しく生きていくことができます。
むしろ、人に助けてもらうことで人間関係が広がり、より豊かな人生になるかもしれません。

おばけ箱発行　牧口一二「あなたと障害者と」より転載